

きもの便り 夏号

【発行】美保姿きもの総合学院 【ホームページ】<http://www.miho-sugata.com/>

No. 0003 和事で、ひとやすみ



「星々の逢瀬」

(七夕の願い)

「夏至を迎えるとなんだか寂しい」と言った蟹座生まれの友人がいる。「そこからまた米粒一つずつ日の暮れが早くなって、だから冬至の方が好き。希望に満ちて心が躍るもの」と。

夏至の翌日頃に双子座からバトンを渡される蟹座は、そういえば寂しがり屋の人が多いかもしいとふと思う。

実際に天文学上の蟹座はこれといって明るい星ではなく、何となくぼんやりとした光を放つ星座。

春に堂々と輝く隣の獅子座とは対照的で、いわばとても地味な星座。同じ夏生まれでも、自分の大切なものをしっかりと守ろうとする蟹座と、平凡とは無縁に自分らしさを生き生きとした光として放つ獅子座とでは、あまりにも対照的な独自のスタイルを秘めている。

それもそのはず、蟹座を守護するものは月で、獅子座を象徴するのは太陽なのだから。

占星学上の夏の星座は双子座で夏至を迎え、蟹座から獅子座へと巡っていくけれど、梅雨空のさなか、七夕の頃の夜空は夏の星座を見つけにくいもの。

旧暦の七夕(8月7日)の頃には夜空もすっきりと澄んで、織姫(こと座のベガ)と彦星(わし座のアルタイル)が白鳥座の橋渡りで結ばれる。七夕の日の晴天率は20%と低いそうで、澄み切った夏の夜空の星々の逢瀬を見ることができるとはなかなか難しいことのようにだけけれど、それでも織姫と彦星が白鳥座を介して一つになれるその時を見ることができたなら、ささやかな楽しみにしている。

「半夏生」

(はんげしょう)

恥ずかしながら「半夏生」を「はんげしょう」と正しく読めるようになったのは、だいぶ大人になってからのこと。

「半夏生」を目にすることはあっても、正しく読めてはいなかった。

それを正しく「はんげしょう」と読めるようになると、口に出して言ってみたくなるから不思議。

“もう半夏生になって、梅雨明けも近いですね”

カレンダーとはまた別の、「暦」。

それは、季節の巡りを歳時記として日々の暮らしを豊かにしてくれる道しるべ。

今も昔も、現代人も昔の人も、冬は寒く夏暑いのは同じで、きっと二十四節季や雑節それぞれに希望や目標を重ねながら、過ごしてきたことだろう。

「半夏生」は農作業の大切な節目であり、それまでに無事田植えを済ませ、田の神様に感謝を捧げる節目の時。

「半夏半作」の言葉のとおり、半夏以降の田植えは収量が減るので半夏生に入る前までに田植えを済ませることが稲作の大事な目安になっていたのだとか。

今年の半夏生は7月1日(7月1日~7月5日)。

暑い、寒いと季節を肌で感じることに同じように、四季が織りなす風景を見つめながら感じることにそのものが二十四節気や様々な雑節と重なっている。

節季を深く知ることができれば、季節の移ろいを更に敏感に感じとれるかもしれない。暑さにめげず抱きながら。

そんな気がする。

文・写真 堀内利子(ハーバルセラピスト)

ゆかた着付け講座3回コース★担当の先生とマンツーマンレッスン受講時間：1回60分×3回
受講料：7000円(税別)日時場所は、応相談
★ゆかた&帯プレゼント【持ち物】浴衣・半襦袢・タオル(2~3枚)・裾除け・肌襦袢(スリッパ)・紐(2, 3本)・コーリンベルト・伊達締め・帯板・おしぼりタオル/お問い合わせ：0120-35-8035
美保姿きもの総合学院